ベートーヴェン生誕 250 年特別企画　特集

ベートーヴェンへの道

交響曲編

これまで、ベートーヴェンのピアノ曲、協奏曲についてその魅力をご紹介してきた「ベートーヴェンへの道」。第 3 回目のテーマは「交響曲」。残念ながら、新型コロナウイルスの影響で公演が多数中止となってしまった本年ですが、まだまだ素晴らしい交響曲をお聴きいただける演奏会を準備しております！
9 月には、佐渡芸術監督による特別演奏会「PAC with ベートーヴェン」を、また 11 月には、「生で聴く “のだめカンタービレ” の音楽会」（8 月公演の代替公演）を開催します！
コンサートに先立ち、ベートーヴェンの交響曲の偉大さについて、中村孝義さんにご寄稿いただきました。
残り少ないベートーヴェン生誕 250 年記念イヤー。存分にお楽しみください！

ベートーヴェンと交響曲　中村孝義（大阪音楽大学名誉教授、音楽学）

この「ベートーヴェンへの道」第 2 回の協奏曲編の時にも書いたことだが、ベートーヴェンという作曲家は、ハイドン、モーツァルトという二人の先輩に様々な点で倣いながらも、音楽家としての意識や創作姿勢を大きく変えていった人であった。自分は王侯貴族に雇われる職人的下僕などではなく、王侯などと同等の、いやそれ以上の価値がある芸術家であるという意識、そしてそれが故に、ただ依頼人の注文に応じるだけの創作活動ではなく、自分の作りたいものを作るという、自分の創作意思を優先させた最初の作曲家だったのである。そしてそうした意識や創作姿勢こそが、彼が創作する領域も従来とは大きく変えていくことになる。それまでの作曲家の活動の中で重点が置かれていたのは、どちらかといえばオペラや宗教曲といった声楽作品であった。ハイドンやモーツァルトといった、交響曲や室内楽といった器楽に多くのすぐれた作品を残している作曲家であっても、例えば彼らが残したオペラの多さ（ハイドン：13 曲、モーツァルト：17 曲）を知れば、彼らが声楽作品の領域に並々ならぬエネルギーを注いでいたことは明らかである。

ところが、言葉や演劇などといった音楽外的なものに頼ることなく、音楽自身が発する音楽的意味によって音楽の存在感を明確に示したかったベートーヴェンは、その創作活動の軸足を器楽の領域に移した最初の作曲家なのであった。それは彼の創作活動の重要な節目に創作されているのが、ほとんど器楽作品であったことを見ればよくわかる。そしてそうした器楽領域の中でも、交響曲というジャンルは、他の重要なピアノ･ソナタや弦楽四重奏曲などと比べても、特別の意味を持っていた。現在でも、大多数の人にとって、ベートーヴェンといえば最初にその交響曲が思い出されるように、交響曲というジャンルこそは、まさにベートーヴェンという作曲家の代名詞的存在なのである。

裏面へ続く

交響曲というジャンルは、ベートーヴェンの時代になると、現代と同様に一般の市民が公開の演奏会で聴ける最も重要な曲種となっていたが、他の器楽ジャンルと比べても、自らの音楽的意図や、音楽を通じて自分の理想や、悩みや喜びや悲しみ、さらには情熱やユーモアなど人間的なものの様々な相を、ドラマティックにより多くの人に伝えられるという意味で、やはり特別な意味を担っていたのである。そしてそのような特別な意味を帯びているからこそ、彼はその創作に、二人の先輩とは比較にならないエネルギーを注いだのであった。ハイドンが 104 曲（＋α）、モーツァルトが 41 曲（＋α）もの多くの交響曲を残しているのに、ベートーヴェンがわずか 9 曲しか残していないのは、何もベートーヴェンの創作力が劣っていたからではない。むしろ彼は、それらの交響曲が、単に消費され、使い捨てられていくものとしてではなく、未来永劫にわたって、何度も演奏され、何度も聴かれ続けることに耐えうる真の芸術作品にするために、それまでとは次元の異なる大きなエネルギーをかけたのである。

交響曲というものの歴史を俯瞰してみると分かるが、交響曲の歴史は、大まかに見て 3 つの時代に分けることができる。一つ目はハイドンやモーツァルトをも含むベートーヴェン以前の古典派交響曲の時代であり、二つ目がベートーヴェンの交響曲の時代、そして三つ目がシューベルトからマーラーにかけてのロマン派時代の、さらにはショスタコーヴィチの交響曲までの時代ということになるだろうか。要するにベートーヴェンの交響曲は、他の作曲家の交響曲を圧して一つの時代を形成するほど大きな意味を持っているのである。ベートーヴェンこそは、交響曲というジャンルの理想形を実現したのであって、彼以前の交響曲はそれへのプレリュードに過ぎず、また彼以後の作曲家たちは、多かれ少なかれそれを規範と受け止め、その影響を受けないではいられなかったのである。交響曲文化は近代文化史上に聳える大きな出来事であるが、ベートーヴェンの交響曲こそが、西洋文化全体における音楽のステータスを大きく持ち上げるとともに、音楽を時の文化を主導する芸術へと高める役割を果たしたのであった。

近日開催！ベートーヴェンの交響曲を愉しむ演奏会！

芸術文化センター管弦楽団 特別演奏会

佐渡 裕　音楽の贈りもの PAC with ベートーヴェン！ 第 1 回

2020.9.12[土], 13[日] 2:00pm (1:00pm 開場)

A￥4,000　B￥3,000　C￥2,000　D￥1,000 (全席指定・税込)

指揮・芸術監督：佐渡 裕
管弦楽：兵庫芸術文化センター管弦楽団

PROGRAM
ベートーヴェン：
交響曲 第 1 番、第 3 番「英雄」

主催：兵庫県　兵庫県立芸術文化センター

生で聴く “のだめカンタービレ” の音楽会 <オーケストラ版>

2020.11.1[日] 3:00pm (2:15pm 開場)

S￥6,800　A￥5,800　B￥4,800 (全席指定・税込)

企画・指揮・おはなし：茂木大輔　ピアノ：高橋多佳子
管弦楽：日本センチュリー交響楽団

PROGRAM
ベートーヴェン：交響曲 第 7 番　ほか

♪10/31(土) 1:00pm はピアノ版♪
ピアノ：高橋多佳子　トークゲスト：茂木大輔
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」より第2楽章　ほか

※10/31, 11/1 両日を聴ける S 席 2 公演通し券は￥9,800

主催：関西テレビ放送、兵庫県、兵庫県立芸術文化センター、キョードー

会場は両公演とも 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

［お問合せ］芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255 (10:00am-5:00pm 月曜休 ※祝日の場合は翌日)